

上新電機オーディオ試聴会 (2014.9.14)

—iFi オーディオ製品の試聴—

1. はじめに

ジョーシン日本橋 1 ばん館単品コンポオーディオ試聴会で「iFi オーディオで極める PC オーディオ」と称して iFi オーディオ製品を聴けるというので A 氏とともに参加してきました。現在取り組んでいる micro iDSD の技術情報や使いこなしに関する情報を得るのが目的です。

2. 試聴会の進行

まず最初に会社の成り立ちや主任エンジニアの経歴紹介、micro iDSD の仕様の紹介などがあり、試聴の手締めは DSD 対応 DA コンバーター競合機種との聴き比べから始まりました。KORG の DS-DAC10 と FOSTEX の HP-A8 と micro iDSD 単体機で AudioGate3 により 44.1KHz,24bitWAV の曲を再生し、比較試聴しました。確かに 3 機種で音の変化は明確に感じ取られましたが、音楽ジャンルがクラシックではないため、比較評価の指摘は控えたいと思います。なお、試聴システムはアキュフェーズのプリとパワーアンプおよび B&W のスピーカーです。



次に micro iDSD に同社の機器を加えて再生ソフトを foobar2000 に替え、本格的な試聴に移りました。PC と micro iDSD の間には、iUSB Power を介在させ、音楽信号とバスパワーラインを分離させます。このことによりノイズ低減効果があるとのこと。

<http://ifi-audio.jp/iusb.html>

また、micro iDSD は固定出力とし、アキュフェーズのプリアンプとの間に真空管プリアンプ/バッファアンプの iTube を介在させ、真空管サウンドを加味しようとするものです。真空管は General Electric の #5670 だそうです。

<http://ifi-audio.jp/itube.html>

最初はネットオーディオの付録の 256sDSD 音源で、録音やミキシングの様子の紹介も

あり、44.1KHz,16bit へのダウンコンバート音源や 384KHz,PCM 音源と比較で聴いていきました。DSD とその他との違いは明確に聴き取れましたが、これも音楽ジャンルに馴染みがないため、DSD のメリットは何かを適切に表現することはできませんでした。ただ一つ言えることは電子楽器でないピアノがベーゼンドルファーでしたが、いずれのフォーマットでもクラシックのコンサートで聴くベーゼンドルファーらしい音のように感じられませんでした。このあたりはネットオーディオのベーゼンドルファーに言及した記事は誇張に過ぎるような気がします。

次にクラシックということでソルのギターソロ曲とマーラーの 1 番の終楽章のサンプル音源を聴きましたが、このものは自分でもダウンロードして聴いています。

foobar2000 の問題なのか、iUSB Power や iTube の介在の問題なのか、自宅で HQPlayer で micro iDSD の電池駆動で聴く音に対して、ギターの音のクリアーさやホルンの音のニュアンスや総奏の爆発などに若干不満を覚えました。

この後、USB 入力の受けの XMOS パートや BB の DAC チップ周りの構成とプログラミングの説明があり、実際に基盤を回覧してもらいました。プログラミングは独自開発のもので、このためファームウェアの update も可能とのこと。実際 nano iDSD は 256sDSD への対応もファームウェアの update とドライバーの update で可能になっています。

この後、ジャズピアノの即興演奏のほとんど編集なしの曲がかけられ、この曲のパフォーマンスは DSD 本来の良さを満喫できた本日の白眉でした。ピアノは Steinway でもないし、YAMAHA でもないし・・・と迷っていたので、後で尋ねたらホロヴィッツその他の大御所が最良の Fazioli とのことので納得できました。検索したら、Fazioli を弾くジャズピアニストは結構多いようで、これは認識不足でした。DSD と言えども録音や編集のプロセスが重要ということが良く認識できました。

さらに試聴会の終わりにかけて、定番のデモ曲と言うことでポップス系統を連続で聴かせてもらいましたが、馴染のない音楽ジャンルということで DSD の良さはこれだというポイントが分かりませんでした。なお、Hotel California だけはアナログ盤を持っていますが、DSD と言えどもこの場合はアナログに及ばないという印象でした。

デモ全般の音質については、前日 A 氏が販売店のアサヒステレオセンターに依頼して行った micro iDSD の試聴の機会の方が、アサヒステレオセンターの試聴機の種類や A 氏の選曲の良さや HQPlayer による再生や最近話題のインフラノイズのケーブルの使用もあって、その印象が強く残っており、今回ディーラーがなされるというデモへの大きな期待には達しませんでした。

<http://audiokenkyu.sakura.ne.jp/wordpress/wp-content/uploads/2014/02/fe193d3d4c7be5127c1c0836ab1aafec.pdf>

録音やミキシングその他 micro iDSD のいろいろな技術解説、基本的には安易なアップサンプリングは避けているなどの設計思想の説明は非常に有益でした。なお、スペック

上は随分と高次のアップサンプリングが可能となっているとのことでしたが、音源の供給やPCの負荷などを勘案すると、256sDSDあるいは384KHzDXDが実用の範囲ということのようでした。

以上、不案内な音楽ジャンルのデモが中心でしたので若干ネガティブなコメントもしましたが、本日のジャズピアノの演奏曲や前日のASCでの1ビットオーディオ研究会のヴァイオリンのように、アコースティック楽器中心の音楽で録音、編集が的を得ていれば、DSDの可能性は大きいものがありますし、micro iDSDはそのポテンシャルを十分に生かせるものという確信を持ちました。

以上